

ドイツにおける文化財・文化遺産について

―アスマンの『想起の空間』をもとに

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

土屋勝彦
(つちや・まさひこ)

ドイツ語で文化財はKulturgut、文化遺産はKulturerbeと呼ばれるが、文化財の下位範疇として、文化アーカイヴ、文化財保護建築物、儀礼・慣習、保護文化財、無形文化財、文化記念物、文化風景、世界遺産などが含まれる。文化財を考える上で欠かせない理論書として、ドイツではアライダ・アスマン氏の『想起の空間』（安川晴基訳、水声社、二〇〇七年）を挙げることができる。本稿は、この著作を紹介しながら、文化財の根源的な諸問題を考える試みである。

いわゆる「想起された過去」とは、過去についての客観的な知識と同一視される「歴史」ではなく、過去を照らし出し、その意味を探究する現在の解釈や、国民アイデンティティの形成に関わる政治的原形質であるという。過去の歴史的形成物を発見・保存し分類・整理し継承する文化財保護の考えに対して、それをたんなる客観的な歴史資料として保存・提示することに意味を置くのか、「想起の文化」財として解釈し、現在と未

来に向けたメッセージを発信するのか、二つの立場がありえよう。ニーチェが、生に役立つ記憶と生にとって疎遠な歴史を対峙させて以来、繰り返されてきたこの両者の二項対立を、アスマンはむしろ相補的な関係としてとらえなおし、集団的記憶と結びついた「機能的記憶」と記憶の記憶たる「蓄積的記憶」に分け、選別され解釈されてアイデンティティを形成する前者の背景には、無定形な集塊の記憶としての後者があるとする。

文化財という言葉から連想される通り、これは各時代の支配者から見た価値観にしたがって集積されるべき文化アーカイヴであり、支配者の権威を確認・誇示するものとしての政治的な意味合いが強くなる傾向がある。歴史的資料としての記憶の集積物のなかから選択し、整理し、物語や神話に再構成するナショナルな意識には、文化記憶の集団的アイデンティティ強化の意図が窺える。いわば正史としての文化財が前景化するのとは、国家や民族のアイデンティ

ティ探求と自己確認・正当化の動機づけが前提になるからであろう。アスマンは、こうした機能的記憶の弊害を避けるために、蓄積的記憶に絶えずフィードバックすることで、布置されたイデオロギーからの解放と批判的、相対的視点の確保を図るべきだとする。文化財の収集価値基準が、文化選択的視点からなされるのはやむを得ないにせよ、そこから漏れてしまう蓄積的記憶の膨大な資料を残す必要性もある。その場合、文化財の価値を測る基準をどこに置くべきか充分に議論がなされるべきであろう。

アーカイヴという言葉は、始まり、起源、支配のほかに官庁や役所を意味するアルケーに由来するという。アーカイヴを成立させているのは書記システムと書字技術であり、それによって王権の支配経済と管理を可能にした。その役割は保存、選別、公開性の特徴とする集合的知識の蓄積装置といえる。さらにアスマンは、文化財と放射性有害物質が所蔵される条件の近似性を指摘するが、実際フライブルク近郊にある銀山廃坑に「国民文化遺産」が保管されており、文化的記憶がタイムカプセルとして未来に託されている。こうした文化的記憶の保護は、ユネスコの「世界の記憶」プロジェクトにつながってお

り、蓄積されたデータをアーカイヴ化し国際的ネットワークで結ぶことを目指す。そこでは儀礼、習俗や舞踊、唄など口承文化の音声映像アーカイヴも含まれるが、それらは一時蓄積装置という限界を持つ。

以上、アスマンの著作をもとに文化財や文化遺産をめぐる思想的課題について若干検討したが、最後に文化財の現在の課題ともいえる公開性と公共性について付言すれば、ドイツ文化財保存の専門家が指摘するように、さまざまな共同作業への組み込みを国民レベルで実現することにより、集団的記憶の一翼を担いうる公共の意識を育てる試みがなされているという。またアンゼルム・キーファーやジークリット・ジグルドソンのような文化的記憶とメディアをテーマとする芸術家の諸作品を見れば、文化記憶の公共性を考えるうえで大いに参考となるだろう。ホロコーストの記憶を視覚化したベルリンのホロコースト記念碑もその一例といえよう。



ホロコースト記念碑 1



ホロコースト記念碑 2

